



からしだね

2022年5月号
(580号)

キリストの受難 カトリック池田教会

主任：ノノイ・プラザ神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://catholic-ikeda.sakura.ne.jp/church/index.htm>



本号の記事の主題など

教皇による復活祭メッセージ

宝塚黙想の家からのお知らせ

5月のガラスケースのみことばと解説

今月の表紙の絵について

みんなの談話室

忘れられない黙想会

老木木の観察旅行の楽しみ

教皇フランシスコによる

2022年復活祭メッセージ 2022年4月17日

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、主のご復活おめでとうございます。

十字架につけられたイエスが復活されました。イエスの死を悼み、家に閉じこもり、恐れと苦悩に満ちている人々、そのような人々のただ中にイエスは立っておられます。イエスはその人々のところに来て言います。「あなたがたに平和があるように」（ヨハネ20：19）。イエスは両手両足にある傷、脇腹にある傷を見せます。その人は幽霊ではありません。正真正銘のイエスです。十字架で死に、墓に横たえられたその人、イエスです。信じられないといった様子の弟子たちに、イエスは重ねて言われます。「あなたがたに平和があるように」（21節）

わたしたちも戦争の中で迎えたこの復活祭を信じられない思いで見えています。わたしたちは、あまりにも多くの流血と暴力を見てきました。わたしたちの心も恐怖と苦悩に満ちています。多くの兄弟姉妹が爆撃から身を守るために閉じこもらなければならぬのです。イエスが本当に復活し、死に打ち勝ったということを感じるのが難しくおもわれます。これは錯覚なのでしょうか。わたしたちの想像の産物なのでしょうか。

いいえ、錯覚ではありません。東方教会の信徒たちにとって大切な復活祭の宣言が、今日、かつてないほど鳴り響いています。「キリストは復活された。まことによみがえられた」。果てしなく続くように思われた四旬節の終わりに、今日、わたしたちはかつてないほど主を必要としています。2年間のパンデミックを経て、深い痕跡が残っています。それは、手を取り合って、力を合わせて、ともにトンネルから抜け出る時だったのです。しかしながら、わたしたちのうちにはまだイエスの霊ではなく、カインの霊があるのです。アベルを兄弟としてではなく、ライバルとして見て、いかにして彼を排除しようかと考えるカインの霊が、わたしたちのうちに宿っていることを示しています。わたしたちは、愛の勝利を信じ、和解を願うために、十字架につけられ復活した主を必要としています。今日、わたしたちはかつてないほど、主がわたしたちの中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と繰り返し告げてくださることを必要としています。

主イエスにしかできないことです。今日、主だけがわたしたちに平和を告げる権利を持っています。イエスだけが傷を、わたしたちの傷を、負っているからです。主イエスの傷は確かにわたしたちの傷です。二つの理由からそのことが言えます。第一に、わたしたちの罪によって、わたしたちの心の頑なさによって、わたしたちの兄弟殺しの憎しみによって、主に傷を負わせたからです。第二に、主はその傷をわたしたちのために担い、ご自分の栄光のからだから取り除くことなく、ご自分の中に永遠に留めておこうとされたからです。それはわたしたちへの愛の消えないしるしであり、永遠の執りなしの行為であ

り、天の父はそれを見ることによって、わたしたちと全世界をあわれんでくださるのです。復活したイエスのからだにある傷は、わたしたちが平和を得、平和のうちにとどまることができるように、イエスが愛の武器でわたしたちのために戦い、勝ち取られた闘いのしるしなのです。

その栄光に輝く傷を観るとき、わたしたちの疑い深い目は大きく開かれ、固く閉ざされた心は打ち破られ、復活のメッセージを受け入れるのです。「あなたがたに平和があるように」

兄弟姉妹の皆さん、わたしたちの生活に、家庭に、国に、キリストの平和を迎え入れようではありませんか。

残酷で無意味な戦争に引きずり込まれ、暴力と破壊によって傷めつけられたウクライナに、平和が訪れますように。この苦しみと死の恐ろしい夜に、新しい希望の夜明けが早く訪れますように。平和のための決断がなされますように。人々が苦しんでいるときに、力で威嚇するようなことはやめましょう。どうか、戦争に慣れてしまわないでください。平和を希求することに積極的に関わしましょう。バルコニーから、街角から、平和を叫びましょう。「平和を！」と。各国の指導者たちが、人々の平和への願いに耳を傾けてくれますように。約70年前に科学者たちは穏やかでない問いかけを投げかけました。「わたしたちは人類に絶滅をもたらすか、それとも人類が戦争を放棄するか」(ラッセル・アインシュタイン宣言、1955年7月9日)。この問いかけに指導者たちが耳を傾けてくれますように。

ウクライナの多くの犠牲者、何百万人もの難民や国内避難民、引き裂かれた家族、独り残された高齢者、失われた生活、壊滅した都市、そのすべてをわたしは心に刻んでいます。戦争で孤児になり、逃げてきた子どもたちの姿が目に浮かびます。飢えや十分な医療を受けられずにいのちを落とす子どもたち、虐待や暴力の犠牲となっている子どもたち、生まれる権利を奪われた子どもたちなど、世界中で苦しんでいる多くの子どもたちの叫びが聞こえてきます。

戦争の痛みの中にも、ヨーロッパ各地で多くの家庭や地域社会の扉が開かれ移住者や難民を受け入れているという、勇気づけられる兆しもあります。こうした多くの慈愛に満ちた行いが、時に利己主義や個人主義によって荒廃するわたしたちの社会にとって恵みとなりますように。そしてすべての人が受け入れられる社会となることを祈っています。

ヨーロッパでの紛争を通じて、わたしたちが世界の多くの地域で起こっていることにも関心の目を向けるようになりますように。あまりにも多くの地域で紛争状態があり、苦しみ、悲しみがあります。見過ごすことができず、忘れてはならない状況があります。

長年にわたる紛争と分裂に苦しむ中東に平和が訪れますように。この栄光に輝く日、わたしたちはエルサレムの平和と、エルサレムを愛するすべての人々(詩編122参照)、キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒の平和を求めます。イスラエル人、パレスチナ人、そして聖都に住むすべての人が、巡礼者たちとともに、平和の美を体験し、兄弟愛のうちに暮らし、それぞれの権利を互いに尊重しながら、聖地に自由にアクセスすることができますように。

レバノン、シリア、イラクの人々、特に中東に住むすべてのキリスト教共同体に、平和と和解がありますように。

また、長年の緊張から安定を取り戻したりビアに平和が訪れますように。そして、誰からも忘れられた紛争に苦しみ、犠牲者が絶えないイエメンにおいて、最近締結された停戦が国民に希望を与えてくれますように。

憎しみと暴力の劇的なシナリオが続くミャンマーと、危険な社会的緊張が続き、悲惨な人道危機が人々に大きな苦しみをもたらしているアフガニスタンに、和解のたまものが与えられますよう、復活した主をお願いいたします。

アフリカ大陸全体に平和が訪れ、その地で人々が苦しんでいる搾取とテロによる流血、特にサヘル地域におけるテロ攻撃が止まり、人々の兄弟愛の中に具体的な支援を見出すことができますように。深刻な人道危機に見舞われているエチオピアで、対話と和解の道が新たに開かれますように。また、コンゴ民主共和国での暴力に終止符が打たれますように。壊滅的な洪水に見舞われた南アフリカ共和国東部の人々のために、祈りと連帯が欠けることはありませんように。

パンデミックの困難さを抱える中で、犯罪、暴力、汚職、麻薬密売によって社会状況が悪化しているラテンアメリカにおいて、復活したキリストが人々に付き添い、支えてくださいますように。

カナダのカトリック教会が歩んでいる先住民族との和解の道に、復活された主が寄り添ってくださるよう祈り求めましょう。復活されたキリストの霊が過去の傷を癒し、真理と兄弟愛を求めるように心を整えてくださいますように。

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、すべての戦争は全人類に影響を与え、死別や難民の悲劇、経済危機や食糧危機にいたるまで、さまざまな後遺症をもたらします。その兆候はすでにわたしたちが目に見しているところです。絶え間なく続く戦争の兆候、そして人生における多くの痛ましい敗北を前にして、罪、恐れ、死に打ち勝ったイエス・キリストは、悪と暴力に屈しないようにとわたしたちを励ましているのです。兄弟姉妹の皆さん、キリストの平和において勝利をおさめましょう。平和は可能です。平和は義務です。平和はすべての人が責任を持って第一に優先するべきものです。

5月のガラスケースのみ言葉
あなたがたに平和があるように

ヨハネによる福音書20：21
(福音宣教委員会撰)

5月のみ言葉についての解説 ノノイ・プラザ神父

イエスは十字架に架けられる前夜、12人の弟子達と一緒にいました。イエスと弟子達はイスラエルをエジプトから脱出させたモーセの時代から続いていたユダヤ人の伝統的な過越祭を祝っていました。この特別な夜は、後に最後の晩餐と言われるものでした。

それはイエスご自身とイエスの愛する弟子たちにとって最も長い夜だったことに違いありません。その夜は、これからイエスの身に起きる恐ろしい出来事を思い、不安と恐怖に満ちていたと想像されます。そんな時、イエスは弟子たちにこの言葉を初めて言われたのです。「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」と。(ヨハネ14:27)

そして、イエスは死からよみがえった直後に、不安の中にいる弟子たちの前に再び現れて、「あなたがたに平和があるように！」と挨拶をされました。(ヨハネ20:19)これは、魂と身体の繁栄への願いを込めた礼拝です。

「平和」という言葉は新約聖書に92回も出てくると言われていますが、この「平和」は「調和」も意味しています。また、旧約聖書では「幸福」とたびたび関連付けて使われています。これは、紛争がない状態というよりも精神的な幸福と関係があります。

さらに、カトリック教会の教えを解説したカテキズムには次のように書かれています。

「地上の平和とは、メシア的平和の君であるキリストの平和の写しであり、実りです。キリストはご自分の十字架の血によって、ご自分の中で憎しみを滅ぼし、人々を神と和解させ、ご自分の教会を全人類の一致、神との一致の秘跡となさいました。実にキリストは私たちの平和であります。彼は、平和を実現する人々は、幸いであると断言されるのです。」

最近、世界はあらゆる種類の混乱に苛まれています。私達人類にとって平和が必要です！一方で、現代社会における平和は、浅くまた刹那的でもあります。何故ならキリストが私たちのことを第一に考えて下さったように相手のことを大切に思うというキリストが教える平和の考えに基づいていないからです。したがって、私たちは平和の福音を分かち合う努力を続け、正義と友愛の実現に加え人類と自然との調和に取り組み、キリストの平和が私たちの世界に満ちるように努めなければなりません。

全てにおいてキリストの平和が私たち人類の心にとどまりますように。

みんなの談話室

忘れられない黙想会

T.K.

シャローム

主のご復活心からおめでとうございます。

今年、四旬節の黙想会は、私にとって Unforgettable Retreat 忘れられない黙想会となりました。と言うのは、ノノイ神父様の最初で最後の黙想会だと言うだけではなく、従来のもとは一味違っていただけからです。今まで与った講義形式のものではなく、五感を通して私達の魂に神様の息吹きを直接吹き込むものでした。神父様は全身全霊を尽くしてその準備をなさっていました。頭で考えるだけでなく、映像、音楽、お香などを使って私たちに神様の素晴らしさを伝えようとなさいました。言葉の壁を持ちながら（今では随分進歩なさいました

が）、その一つ一つをご自分で製作されたり、選ばれたりするのにどれだけの時間を費やされたことでしょうか。神父様の素晴らしい感性が余すところなく現れていました。私は、心の一番深いところに光が差し込んだような気がして、素直な気持ちで自分の罪を見つめる事が出来ました。

このような黙想会は初めてで、私にとっては宝石の輝きのような半日でした。終ってから神父様に感謝を申し上げたら「ありがとう、でもまだまだ完璧なものじゃないよ。」と謙遜なお言葉が返って来ました。

神に感謝、アレルヤ

老木の観察旅行の楽しみ

隼雄

旅は日常生活では経験できない人々や風土、歴史との出会いをもたらすので生き方の枠を広げてくれるので楽しくもあり、苦しくもある。もう少しで春になる2月下旬の日本から東南アジアのカンボジアに行けば、気候が晩冬から盛夏になり、注意すべきは風邪でなく熱中症となるが気が付くと脱水症状を呈し、旅先で国際〇〇病院での入院加療を余儀なくされた。それ以降は旅先を国内に限られた。国内にある鹿児島県の屋久島の千年杉や秋田県の鳥海山の北麓にある獅子ヶ鼻湿原にあるブナの「あがりこ大王」などの老齢の巨木の姿に触れて、植物の持つ形状の大きな変化に触れて、自身の近未来を覗けるのではないかと思えた。

昨秋の紅葉の前にして、本州の青森と秋田両県にまたがる白神山地にあるブナの巨木を見たくなくて今月初めに航空機と車で白神山地の周辺部（青森県西目屋村津軽峠



獅子ヶ鼻湿原にある老齢
ブナの「あがりこ大王」

と秋田県藤里町岳岱)を訪れて、樹齢400年と推定される2本のブナ巨木と樹齢300年以上と推定されるシナノキの巨木を見る幸運にも与かった。前者のブナの最長寿は3年前の台風による強風で6分の高さで折れていたが、年末から新年に掛けての記録的な大雪でその姿を消した事が報じら

れた。後者のシナノキは信州に限らず日本のどこにでもある高木となることと樹皮内層にある木目？の美しさで盆や皿が作られることでよく知られた樹木だそうですが、老樹になるにつれて幹に多くの瘤と幹に垂直に飛び出した数本の太い枝（胴吹きという）を持ち、地面近くの幹が数本に別れて地下から生え出し、中心部分は空洞化していて、ブナ巨木と見間違えるほどに嘗ての真直ぐに伸びた美形は全く喪失していた。

帰宅直後に、本当にシナノキであるかどうかを秋田営林署の職員に電話で聞くと、花や実はブナ科とシナノキ科では全く異なるので、花と実から両者の若木を区別するのは容易であるのに、種類が異なる老樹木の形状には相違点が乏しくなるとのこと。そう言えば、杉の南限界である屋久島（鹿児島）の標高500^m地点以上に生えた千年杉の巨木では、樹高は上部が朽ち果てて10^mよりも低くなって、下部の樹の周囲の長さは15^mよりも大きくなっている。本州にある細く伸びた杉とは全く異なる姿を呈する。

その胴吹きした枝には若い針葉が茂っていて、その地面に届く幹や根は老齢の幹や根ではなく、若木のように全てが新たに生まれたものに置き換わっているのかもしれない。

植物と動物の間には一般的に幾つかの相違する点がある。光合成を行って成長する植物は自家栄養生物ですが、動物は餌として他の生物である植物や動物を捕食し、特に、他の動物を捕食するために極めて激しい活動を行う。また、植物個体は移動することではなく、細胞レベルで言えばその構造を支えられるように厚めの細胞壁でその姿を維持している。一方、植物の細胞は分裂によっても分化全能性が維持され、分化した器官や組織の形を持たないカルスを生んだり、樹木の所謂「孫生え」を生むが、動物の器官などの細胞は分裂するにつれて他の器官や臓器に分化する事が可能性を徐々に失っ

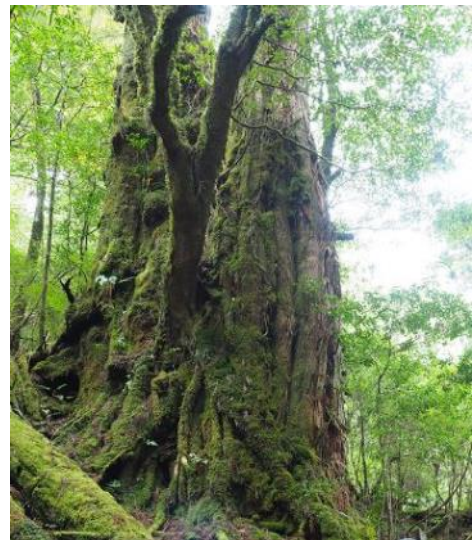
て行く。このために植物の幹から根・幹・葉・花へと分化できる分化全能性を持ち、老齢になると樹皮を分厚くしたり、幹から新しく枝を地平に並行するように生みだせるので、その全体の樹形が若木と高齢樹では一見して別種の樹木かと間違える。

大阪府の北端にある豊能町にある野間の大ケヤキは850歳と推定されているがその樹姿は横に伸びるのではなく、横幅より地上からの高さが優れ、どうにか上に伸びた美しさを保っている。

動物であるわたしらは齢を重ねる間に動ける部分を適度に動かして、その機能を維持し、細胞分裂を阻止させないのが必要となる。しかし、身体の動きを妨げる沈着物とせずに、速やかに体外に排出させるのに成功しなければその機能の低い部分が全体の活動度を低下させるかもしれないとすれば、老廃細胞の排出速度を上げるのが必要なのかもしれない。

寒いグリーンランドに生存している老樹木の樹齢が植物の最長で六千年と聞いたことがあるが、低温が老廃細胞の生成速度を下げるためかもしれない。

生物である限り、老いは誕生の時から始まり、重しに耐えかねて倒れる時が突然やって来る。哺乳類の象と違ってホモサピエンスはその時を知らないが、想像する。



屋久島の紀元杉

宝塚黙想の家からのお知らせ

■ 日帰り黙想会 10:00~15:30

5月10日(火)

指導: 稲葉 善章 神父

5月26日(木)

指導: 染野 治雄 神父

5月27日(金)

指導: 山内 十束 神父



■ 一泊黙想会

5月10日(火) 17:00~ 11日(水) 15:30

指導: 稲葉 善章 神父

5月27日(金) 17:00 ~ 28日(土) 15:30

指導: 染野 治雄 神父

■ カトリック教会のカテキズム

第2・第4 水曜日 10:00~12:00

指導: 染野 治雄 神父

■ 聖地エルサレムを学ぶ

第3 木曜 10時~12時、

指導 笹田六合豊 修道士

■ ギリシャ語で味わう聖書のことば

第1 火曜 10時~12時、

指導 稲葉善章 神父

■ 聖書の基本

第1・3 水曜日 10:00 ~ 12:00

指導: 山内 十束 神父

上記の各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。☎ 0797 (84) 3111

表紙の絵について

「キリストの復活」と題された表紙の絵は、1758年にポーランド画家のシモン・チェホヴィッチ(1689~1775)が描いた油彩画である。復活されたイエス・キリストが屍衣をまとったまま、若々しく優しいお顔でしっかりと立っておられる。その周りを囲む11人の弟子たち。その表情はさまざまである。驚く者、どのように受け止めるべきかと相談する者、ひたすらありがたくて伏し拝む者。イエスの顔を信頼に満ちて仰ぎ見るのは 聖ペテロであろう。このあとキリスト教会は歩み始め、2000年の時を経て現在に至っている。

この絵画はポーランド、クラクフのナショナル・ミュージアムに収蔵されている。

編集後記

この原稿をまさに復活の主日に書いています。2016年の聖霊降臨の主日から教会に通い始めて2017年に洗礼を受けたので、もう6度目の復活祭となります。この間、(新型コロナのためだけでなく)仕事や家庭の都合を優先してミサにあずかることを怠ったり、広報委員会の仕事もほとんどできずにいて、信徒として、教会の一員として申し訳なく思うことも多々あります。しかし、申し訳なく思うのは実は聖書に見られる「裁く神」を恐れているのかもしれない。もちろん神が裁く方であることは間違いありませんが、神が「愛の神」、「赦す神」でもあることに信頼して、これからの自分の生き方を委ねていけたら、と考えています。

パウロ